

JICY-3708

# SERGIO MENDES & BRASIL '77 PAÍS TROPICAL

## セルジオ・メンデス&ブラジル'77 パイストロピカル+ ①

- 1 パイス・トロピカル  
PAÍS TROPICAL  
(Jorge Ben)
- 2 ソー・メニー・ビーブル  
SO MANY PEOPLE  
(P. Williams / R. Nichols)
- 3 なつかしき丘  
MORRO VELHO  
(Milton Nascimento)
- 4 ザンジバル  
ZANZIBAR  
(Edu Lobo)
- 5 トンガ  
TONGA  
(Toquinho & Vinícius Moraes)
- 6 ゴーン・フォーエヴァー  
GONE FOREVER  
(Paul Williams)
- 7 アーザ・ブランカ  
ASA BRANCA  
(Luiz Gonzaga & Humberto Teixeira)
- 8 アイ・ノー・ユー  
I KNOW YOU  
(P. Williams / R. Nichols)
- 9 アフター・ミッドナイト  
AFTER MIDNIGHT  
(John J. Cale)
- 10 パイス・トロピカル(日本語)  
ポーナス・トラック  
PAÍS TROPICAL  
(Japanese - Jorge Ben)

①~⑩ © 1971  
&M Records

\*オリジナルは、本紙までオリジナルのジャケット・デザインを尊重して制作してあります。原曲既知他、LP発売当時のままで再現している点についてはご了承下さい。

ユニバーサル音楽情報満載!!  
http://www.universal-music.co.jp/ucpp/

<取り扱い上のご注意> ●ディスクは両面録、録音、方向、キズ等を行わないように取り扱って下さい。 ●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内蔵から外面に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード両ケラーや溶剤等は使用しないで下さい。 ●ディスクは両面録、転写、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。 ●ひび割れや変形、又は複製利用等で複製したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。 ●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。 ●ディスクは敬請、元のケースに入れて保管して下さい。 ●プラスチックケースの上に乗るものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

60年代中頃、アメリカに渡って西海岸のポップ・シーンに身を投じて一世を風靡したセルジオ・メンデス。66年に立ち上げた後のグループ、ブラジル66は71年に発表された前作「スティルネス」で、なんとフォーク・ロックに接近しました。ブラジル66の中でも異彩を放っていたこの作品は、ブラジル66にとって最後のアルバムでもありました。とは言っても、セルジオ・メンデスは活動を停止したわけではありません。グループ名を、ブラジル77と変更して、再出発したのです。

再出発なんて言うとは話は大げさですが、当のセルジオにしてみれば実は大したことではなく、66年にデビューしてからブラジル66で言うてただけよく考えたらもう70年代じゃん、というワケで、グループ名を変えただけ、のようですね。しかもまだ77年になってないのに、毎年変えるのもめんどうだから、いやいや77で、なんてノリだったんじゃないかと思えます、セルジオのことですから。

さて、そのセルジオ・メンデス&ブラジル77の、最初の作品が、この「パイス・トロピカル」です。メンバーは、ほぼ前作「スティルネス」と同じ。ツイン女性ヴォーカルがグラシーニャ・レボラーンとカレン・フィリップ。ベースはセバスチャン・ネト。ドラムスはクラウデオ・スローン。パーカッションはルーベンス・パッシニニと、もうひとり、ラウヂェル・ソアレ・デ・オリヴェイラ。ギターにオスカル・カストロ・ネヴィス。オスカルがゲスト扱いではなくメンバーとして迎えられたため、写真も8人編成となっています。ただし「スティルネス」は、グラシーニャが加入する以前のジジ・ジジ・ソニー・ソニー時代の録音が多かったので、グラシーニャをはじめとするブラジル77の新生メンバーによる新作は、実質的には本作「パイス・トロピカル」が最初ということになります。そうそう、グラシーニャがセルジオ・メンデス夫人だということも忘れちゃいけませんね。

プロデュースとアレンジはセルジオ自身。ただしオーケストラ・アレンジに、「Ye-Me Le」以来のデイヴ・グルーニングが復活（1曲目と9曲目のみ、トム・スコットが担当）しています。ゲストに、そのトム・スコット（テナー・サクソフ）、ジム・ケルトナー（ドラムス）、カール・ラドリー（ベース）と、名うてのセッション・ミュージシャンが迎えられています。

★

さて、グループ名も改めてこの作品、果たしてサウンド面での変化はあるのでしょうか？ ゲストのアメリカ人ミュージシャンの顔ぶれを見ただけでもサウンド面での変化は想像できますが、1曲目の「パイス・トロピカル」から飛び出すホーン・アレンジが被ったファンキーな表情に驚かれた方も少なくないのではないのでしょうか。ブラジル音楽的というよりはアメリカの南部音楽的な土臭さすら匂うこの曲、「スティルネス」より以上に「ファンキー」ということにセルジオがこだわっていることがよくわかります。でも、どうせファンキーやるんだったら、ブラジルならではのファンキーで行こう、と思ったのか、素材に選ばれたのがブラジリアン・ファンク・マスター、ジョージ・ベンが69年に発表したナンバー。これがアルバム・タイトル曲なので、この作品のキーワード

は、やっぱりファンキーなのでしょう。

続いての「ソー・メニー・ビーブル」は、ここしばらくナリを潜めていた、久々に初期のブラジル66を思わせるソフトロック・テイストのナンバー。まさにA&Mサウンドの顔でもあった、ポール・ウィリアムスとロジャー・ニコルスの作品です。“題でもあった”と言ったのは、この「ソー・メニー・ビーブル」という曲がウーナ系列のリブリーズからリリースされているからです。当時、ポール・ウィリアムス&ロジャー・ニコルスは、ソングライティング・チームとしてカーペンターズが歌った「愛のプレリュード」をはじめA&Mで数多くのヒット曲を残していますし、ロジャー・ニコルスはアーティストとしても、ロジャー・ニコルス&スモール・サークル・オブ・フレンズ名義で作品を残しています。しかしポール個人はホリー・マッカレルというグループでリブリーズからデビュー、その流れでソロ・アルバムも間レベールからリリースしてしまっていました。その後、續れて(?)ポールはA&Mに移籍するのですが、「ソー・メニー・ビーブル」は70年にリブリーズから発表されたポールのソロ「サムデイ・マン」に収録されていたナンバー。全曲、ポール・ウィリアムス&ロジャー・ニコルスの曲で占められた大名盤ですが、「ディスカヴァリー・アメリカ」を旗印にしたパーバンク・サウンドと、A&Mの西海岸イージー・リスニング・ポップがリンクした作品とても興味深い作品です。でも、セルメンのアレンジはやっぱりファンキー。ブルース・ハープまで飛び出しています。

「モーホ・ヴェーリョ(なつかしき丘)」はミナスジェライス州出身のミウトン(ミルトン)・ナシメントのナンバー。ミウトンは当時、A&Mが傘下レーベルとしてスタートさせたジャズ/クロスオーバー・レーベル、CTIからアメリカ・デビューを果たしたばかりで、そのアメリカ進出第1作「コーリッジ」(発表は70年)収録曲です。エウミール・デオダートがプロデュースしたオリジナル・ヴァージョンと聞き比べて見ると、セルジオは翻りとオリジナルの雰囲気を活かしているような気がします。本作ではグラシーニャがシンガーとしてかなり前に出ていますが、この曲はまさに彼女の独壇場、せつせつと情感たっぷりな歌い上げられています。

續く「ザンジバル」はエドゥ・ロボ作のスケッチ名曲。これをセルジオ・メンデス&ブラジル77が取り上げるということは…! いやはや、こういうところで期待を外さないどころか、思いっきりレベール振り切ってやってくれちゃうところがセルジオ・メンデスなんですよね。グラシーニャのスケッチ、炸裂。セルジオのピアノも弾みまくる。パーカッションも鳴りまくる。ラテン・ジャズ仕様で約5分近く、8人が轟いてくれます。

「トンガ(ア・トンガ・ダ・ミロンガ・ドゥ・カブレ)」はトッキーニョ&ヴィニシウス・ヂ・モラエス作のMPB。71年に、トッキーニョ&ヴィニシウスと組んだ女性シンガー、マリリア・メダリーヤとマリリア・ベターニアが共に歌っています。セルジオもヴォーカルで参加、ポルトガル語で歌われていてフォーキーなアレンジに仕上がっています。

「ゴーン・フォーエヴァー」は再びポール・ウィリ

アムスのナンバー。こちらは、ポールがA&Mに移籍して(つまりセルジオのレーベル・メイトとなって)からの1作目「ジャスト・アン・オールド・ファッションド・ラヴ・ソング」(発表は71年)の収録曲。ソフト・ロック・ミーツ・フォーク・ロックといった感じの、ブラジル66からの流れを汲んだタイプの曲です。コーラス・ハーモニーやストリングス・アレンジにはビートルズの影響も漂っている気がします。

さて、またまた山場。續く「アーザ・ブランカ」はブラジル北東部の音楽、バイオンの王様、ルイス・ゴンザガの代表曲です。ここでセルジオは北東部リズムとファンクを融合させてミディアム・ファンキー・グルーブを作り上げています。本当はちゃんと歌詞のある歌ですがヴォーカルはハミングのみにして、ほぼインストゥルメンタルで仕上げているのはCTIサウンドを意識していたのでしょうか。短い曲ではありますが、終盤のジャズ・ファンク的な展開も楽しそう

です。「アイ・ノー・ユー」は、恒例になったセルジオが歌う時間。今回は英語で、ポール・ウィリアムス&ロジャー・ニコルスの曲にチャレンジです。これは前述の「サムデイ・マン」収録曲。種々なストリングス・アレンジに乗ってムーディに歌っていますが、上手くはいかないがご愛嬌。

ラスト・ナンバー「アフター・ミッドナイト」はなんとJ.J.ケール作のファンキー・ロック。1曲目同様トム・スコットがファンキー・ホーンをぶっ放しています。作者のJ.J.ケールはオクラホマ出身のギタリストシンガー・ソングライターですがウンプンファンキー系の曲が得意な人。エリック・クラプトン、デラニー&ボニー、レオン・ラッセルなどの交流でよく知られています。この「アフター・ミッドナイト」はJ.J.本人も71年に自身のアルバム「ナチュラル」で取り上げていますが、70年発表のエリック・クラプトンの初のソロ・アルバム「エリック・クラプトン」に収録されているヴァージョンが、有名です。「パイス・トロピカル」がスワンビーンファンキー路線だったのはやはり偶然ではなく、レイドバック入ってたんですね、当時のセルメン。これで今回のゲストも納得。ジム・ケルトナーもカール・ラドリーも、デラニー&ボニーの作品に参加していますし、カールは、ズバリ、J.J.ケールの「ナチュラル」でベースを弾いています。それにしても、やりたいサウンド、目指すサウンド、現場の人をそのまま呼んできちゃうセルメン、なんてわかりやすい人なんでしょう(笑)。でも、そのわかりやすさがセルメンの魅力。そして真意にいろんな音楽を取り込んで吸収していく、という感じではなく、その時その時、気になったものにポンポン反応していく、という手軽さ。このポスト・モダンというカスキノな感覚こそが、最終的にセルジオ・メンデス&ブラジル77ならではのポブスに仕上げたというセルメン・マジックの原動力だったりのかもしれません。そして、彼らの冒険は、70年代を通過しても続き、80年代、90年代を経て、今なお、続いているのです。

Julho 2002 麻生雅人